開発途上国の人々に〝光〟を届けたい

世界には、いまだ電気が行き届いていない人がたくさんいる―。JICA産業開発・公共政策部の久下勝也さんは、開発途上国の電力不足の解消に向けて奔走している。

ケニアの地熱地帯を調査する現地の技術者と久下さん（左端）

エネルギーを通して開発途上国の問題を知る

小さいころから機械が好きで、世界最高峰の自動車レースのF1に憧れていました。将来はF1のエンジニアになりたい―。その夢を実現するために大学は工学部に進み、エネルギーの研究に打ち込みました。

しかし勉強すればするほど、石油や石炭などエネルギー資源には限りがあること、地球全体に温暖化をもたらすこと、開発途上国には電気を使いたくても使えない人がたくさんいることなど、F1のような華やかな世界以外の部分が見えてくるようになりました。

まずは自分の目で現状を確かめようと、日本のNGOのボランティアツアーでウガンダとエチオピアを訪れました。訪問先は多くの子どもがHIV／エイズで親を失った農村。電気は通っておらず夜は真っ暗。困っていた村人たちの姿を目の当たりにして、彼らの生活に光を当てられるような仕事がしたいと強く思うようになりました。

電力を求める人々の声を聞く

入社6年目に配属されたのは、西アフリカのシエラレオネ。約10年間続いた内戦の終結から5年が経っていましたが、まだまだ復興が進んでいない状態でした。そこでJICAは、この国の人々が何に困っているのか、どのような支援を求めているのか調査をすることに。でもどこに行っても、初対面は決まって「あなた誰？」「何ができるの？」という顔をされ、なかなか心を開いてくれません。私は何度も彼らの元に足を運び、時間をかけて話すようにしました。

聞き取りを通じて分かったのは、住民が最も困っていることの一つが電力不足。以前は電気がきていたのに、内戦中に発電や送配電設備が壊れ、機能しなくなっていたのです。現地の国家電力公社（NPA）の職員に話を聞くと、「設備も人手も足りない。復旧に日本の力を貸してほしい」と―。「これはもうやるしかない！」と、まずは電力設備の維持管理状況についての調査を始めました。その後、私は別の部署に異動になりましたが、2011年、その調査結果を基にNPAへの技術協力がスタートしました。

日本の技術力で途上国に電力を届ける

そして2013年、産業開発・公共政策部で任されたのが、あのシエラレオネの技術協力でした。少しずつ成果が出始めたころで、住民やNPAの職員たちが喜んでいると知り、胸がいっぱいになりました。

貧困を減らすには経済成長が必要ですがそれを支えるのが電力です。しかし、世界には、まだまだ電力不足に悩む国がたくさんあります。発電や送配電設備の整備、人材育成など、取り組むべき課題も盛りだくさんです。そこで私たちが目を付けているのが日本の技術力です。

先日、ケニアの地熱発電所を視察したのですが、そこで活躍していたのが地下の蒸気でタービンを回す日本の発電プラント。自然エネルギーを使っているので燃料を買う必要はなく、環境に優しく、継続的に安定した発電ができます。まさに今、多くの途上国が求めている発電技術。これを使わない手はありません。

日本にはこういった優れた技術がたくさんあります。途上国の電力供給に生かせるものがあれば積極的に活用したいと、関連企業に足を運んでいます。しかもこれは、日本企業にとっても、今後の海外展開に向けてのビジネスチャンスになる。日本の技術を活用して途上国の電力不足を解消する―。このアプローチで、一人でも多くの人に電気を届けられるよう、日々の業務に取り組んでいきます。

シエラレオネの同僚たちと復興に力を注いだ久下さん（右端）

JICA産業開発・公共政策部
資源・エネルギーグループ
主任調査役
久下勝也
KUGE Katsuya

大学院修了後、2002年にJICAに就職。無償資金協力部（当時）、ガーナ事務所、シエラレオネ・フィールドオフィス、アフリカ部、総務部を経て、2013年3月から現職。